

テーマ：日本の左翼はなぜ影響力を失ったか

太田昌国『極私的 60年代追憶 精神のリレーのために』をいかに読む/ 応答するか

1. 資本主義のオルタナティブとしての「社会主義」の失墜

1) 抑圧の体制としての「社会主義」国

<マルクス＝レーニン主義の基本路線>

生産手段の私的所有の廃絶が必要、そのために

ブルジョア国家の暴力的破壊＝暴力革命とプロレタリア国家：死滅する国家の樹立

プロレタリア国家を梃子とするプロレタリアート独裁

ブルジョアジーの収奪と、生産手段の国有化

プロレタリア国家（ソビエト）の死滅と生産の社会化

<上記基本路線の破綻>

国家は死滅せず、<官僚機構と軍隊>＝ブルジョア国家機構が復活

ブルジョア国家機構の「革命政党」による独占

ブルジョア国家機構による労働者の搾取・管理・支配・抑圧

そんな体制を誰も望まない

2) 「死滅しない国家」の根拠その1

官僚機構と軍隊の肥大化・抑圧装置化を招く要因としての暴力革命。敵と相似形の革命組織：中央集権的党組織と革命軍。権力を握った中央主権党による、官僚組織と革命軍への依拠に基づく一党独裁。反革命からの革命の防衛という大義名分。国家の死滅という共産主義の理念の放棄。暴力革命によって権力を掌握した場合、革命党による党の革命、すなわち一党独裁から、権力の分散、労働者による対抗権力の形成、プロレタリア民主主義の形成をめざす党への転換が唯一の道。しかしながら、経験主義・現実主義の支配と党の革命の困難。党の、官僚・常備軍への拝跪・溶解。

3) 「死滅しない国家」の根拠その2

官僚機構の肥大化・抑圧装置化を招く要因としての生産手段の国有化とその下での「計画経済」の運営。産業連関表を管理運営する官僚機構に依存。その下での生産・流通・分配・消費における労働者の支配・コントロール。

4) 「死滅しない国家」の根拠その3

官僚機構と軍隊の肥大化・抑圧装置化を招く要因としての「帝国主義の包囲」。「帝国主義の反革命介入から革命を防衛するために」ブルジョア国家機構の増強が正当化された。

国家の二面性：階級抑圧の道具と他の国家との抗争。レーニン『国家と革命』の射程は前者のみ。

マルクス＝レーニン主義の枠組みは、それゆえ下からの世界革命の推進（世界党建設と社会主義国の拡大）。後者の問題に対応するには、上からの世界政府形成運動が不可欠。

2. 新左翼党派運動の路線問題

1) 政治の狭さ。

a) 国家＝「階級抑圧の道具」論。

b) 60年代新左翼党派運動の当面の目標は、「機動隊の壁」の物理的突破。その延長としての武装闘争。

c) 政策阻止闘争の急進化としての政治闘争。

2) ブルジョア権力の作動様式の多層化

a) 官僚制と常備軍

b) 法と処罰

c) 規律訓練：個人の肉体に働きかけ、規律＝「監視の視線」を内面化させ、国家に奉仕する能動的主体を形成する。家族、学校、工場、兵舎、監獄、病院。

d) 環境管理：個々人の内面に働きかけるのではなく、個々人が置かれた環境あるいはそのゲーム

の規則に働きかけることによって管理する。市場・統計・保険、個人認証と情報管理、ゲッターとゲーテッドコミュニティ、「アンダーグラス」に対する QOL ポリシングとゼロトラレンス政策（無秩序と犯罪は結びついている）

3) 支配的権力作動様式の変遷と革命の戦術

- a) 君主型：官僚制と常備軍、君主の権威。これに対応する機動戦。「東方革命」。
- b) 規律訓練型：強力な市民社会の塹壕＝内面化された規律、主体形成を行う規律訓練装置。これに対応する陣地戦＝規律訓練装置を階級闘争の場に。「西方革命」。フォーディズム、福祉国家。
- c) 環境管理型：規律訓練装置の変容・解体 - 環境管理テクノロジーが支配的に。主体の規律訓練装置からの横溢・社会への拡散。あるいは排除と隔離（主体形成＝包摂の放棄）。社会的労働者あるいは日雇い派遣労働者、自由学校、開放病棟、在宅ケアなど。ポスト・フォーディズム、新自由主義国家。陣地戦の無効？新たな時代における有効な戦術はなにか。

3. 新たな戦術・新たな組織をめぐる問題提起

- a) 「既存の政党や労組によっては組織化されないプレカリアーとたちの分子状運動がおのれの自律性をそれとして維持しつつも「既存の勢力に対応し得る」ものとなるために、モル状の次元での新たな政治的組織化の考案が求められる」「どんな社会闘争も「分子状」（フロー、生成変化、相移転、強度など）であるのと同時に「モル状」（主体/客体/表象の固定的配分）でもなければならず、敵対しあうこれら二つの次元の接合を可能にする新たなロジックを開発し、両者があくまでその敵対関係を維持したままそれでもなお運動しうるようにしなければならないという課題」（廣瀬）

ブラジル：労働者党、ポルトガル：左翼ブロック、フランス：反資本主義新党、左翼党

スペイン：怒れる者たちの運動と Podemos

b) 新しいアナーキスト

「アナーキズムは高踏理論構築の役に立たないだけではない。それは何よりも、実践の形式に関わるものなのである。だから、それが何より重視するのは、①方法が目的と協調していなければならない、②権威主義的な方法によって自由を獲得することはできない、③できうるかぎり、自分の友人や同志とのなかで、自らがめざす社会を具現化せねばならない。」（グレーバー）

4. 研究会での議論を受けての付記

- 1) 研究会では、本レジュメの後に添付している太田の著作からの抜粋を紹介した後、本レジュメの報告を行い、討議に入った。
- 2) 1990年代末まで、私自身が上記＜マルクス＝レーニン主義の基本路線＞の信奉者であった。が、00年代に入ってから疑問を持ち始め、以降全面的な見直し＝自己点検を余儀なくされた。本報告はこの間の自己批判と新たな路線の模索の中間報告である。今回取り上げた太田の著作の論点は、出発点の違いにも関わらず、私にとって大きな励ましであり、乗り越えるべき課題である。
- 3) 変革主体の暴力が敵との相似形に陥るのは蓋然的ではあっても必然的ではないこと、これまでの歴史的経験が示している闘う主体の相似形に陥らないための試行錯誤とその教訓は多様かつ豊富でそこから学ぶべきことが多くあること、という指摘についてはその通りだと思っている。問題は、蓋然性から必然性への転化をどのように防ぎうるかである。
- 4) 新左翼党派運動の路線の狭さについては、半世紀後の現時点から振り返ると、当時の世界的な情勢とともに、レーニン「国家と革命」の道具論的国家観に強くとらわれていたことに大きな要因があるように思われる。陣地戦を主要な戦術とし、社会・経済闘争と政治闘争の分離と結合を通じたより広く・深い主体形成戦を行うべきであった。21世紀の現在においても、依然として同様の狭い路線から抜け出せない新左翼党派もいるように思われるが、主体のありようや権力の作動様式が大きく変化する中で、全くの機能不全というべきである。
- 5) かつて「敵の出方」論が主張されたこともあったが、我々の戦術と組織を規定するのは、「敵の出方」ではなく、主体のありようである。ポストフォーディズムにおける主体のありよう、その主

体形成の方法、抵抗の仕方、それに対応する権力の作動様式の変化、これらに対応する新たな戦術、新たな組織が日々「自然発生的に」生み出されている。そうした中で、共産主義者の果たすべき新たな役割とは何かを、問題意識を共有しうる諸同志と共に探求したいと強く願っている。

参考文献

- ジル・ドゥルーズ「追伸 - 管理社会について」『記号と事件』（河出文庫）
東浩紀「情報自由論 2002-2003」『情報環境論集』（講談社）
佐藤嘉幸『新自由主義と権力』（人文書院）
酒井隆史『自由論』（青土社）
廣瀬純『暴力階級とは何か』（航思社）
デヴィッド・グレーバー『アナキスト人類学のための断章』（以文社）
太田昌国『「極私的 60 年代追憶 精神のリレーのために」』（インパクト出版会）

太田昌国「極私的 60 年代追憶 精神のリレーのために」（インパクト出版会）からの抜粋
- 国家・暴力・組織をめぐって

「埴谷はいう。

政治を政治たらしめている基本的な支柱は、第一に階級対立、第二に絶えざる現在との関係、第三に自分の知らない他のことのみに関心を持ち、熱烈に論ずる態度である。自分の知らない他のことを論ずるために、私たちはまず他人の言葉で論ずることに慣れ、次第に、自分の判断を失ってしまうのが通例であるが、この他人の言葉を最も単純化した最後の標識は、さて、一つのスローガンの高唱の中に見出せる。私たちが他人の言葉によって話すということは、もちろん、他人の思想によって考えていることであるが、そこから次のような現代の構図をもった悪しき箴言を引き出すことができる。

スローガンを与えよ。この獣は、さながら、
自分でその思想を考えつめたかのごとく、
そのスローガンをかっいで歩いてゆく。」（101 頁）

「既存の社会の変革は必要だが、それは、正統派の社会主義者が考えるように中央集権的な革命党によって担われるのではなく、大衆の自然発生的な叛乱によって成就されるものである。人間の小集団の中で保証されている初原的な平和状況は、人間の本性が善であるがゆえに、そのまま国際社会を作り上げている大集団にまでに広がるに違いない。」（103 頁）

「組織論なきアナキズム運動が、既存の権力の悪に立ち向かうとき、「統制すべき権威を自分の組織としてもたない」がゆえに「個人の暴力の自然発生をチェックするものを持ち得ない。勝利に対する「歴史的必然」の保証もなく、たよるべき政党組織もなく、かつ権力の側から厳しい弾圧が加わるとき、デスペレートな個人の事情は、しばしば、アナキズムの信者をテロリストにする」（松田道雄「日本のアナキズム」、現代日本思想大系 16『アナキズム』解説、筑摩書房、1963 年）」（105 頁）

「アナキズムはさらに重大な難問を抱えている。（中略）こうも言える。小集団の中でなら可能な平和で水平的な関係性が、世界の随所で無数に形成されるとしよう。それらが相互に連なりあって民主主義的な世界空間の形成に至るなら、それでよいのだ、と考えるとすれば、小集団という「地域性」が、人類全体を包含する「世界性」に到達するための媒介項は、何なのか、と。アナキズムがそのための理論装置を欠いていることは明らかであろう。」（106 頁）

「党派政治は短期的な政治目標を掲げて、「政治」活動・「政治」工作を行う。それを有効ならしめるためには、「イデオロギー」的な支配・統制・管理・抑圧をも躊躇うことはない。残念なことには、それを信じて活動する人々は、とりわけその指導的立場に位置する人々は、そこで発揮されがちな権力性が、いかに危険なものであるかということに無自覚である場合が多い。無自覚というよりは、自らが手中に収めた組織権力、そしてゆくゆくは国家権力を十全に行使することは「革命の大義」によってすべて肯定されると信じて疑うことがないのだから、その選択は、確信に満ちてなされている。広い意味でのアナキズム的な立場は、それを疑う。短期的な政治目標のなかでは、二つの立場は衝突しよう。しかし、時間の幅を長く取った場合には？狭い党派政治の枠に縛られることなく、政治というものを広い意味でとらえた場合には？—このような問答は、長期にわたらざるを得ない「人類史の過渡期」にあっては、本来は避ける事ができないはずのものだ。」(110 頁)

「「自由」と「連合」を基も、民衆の自治を求めた経験」「「権力を求めない社会運動、あるいは「国家権力の掌握を目的としない」革命」「ロシア革命初期において共産党一党独裁が開始される以前のソヴェトの確固たる存在、中国革命やベトナム革命における国家権力獲得以前の自治区としての根拠地形成の経験などがそれに当たるだろう。」(111 頁)

「サパティスタは、次のように語っている。

われわれはメヒコにおける革命的変革は、たった一つの意味での行動の結果であるとは思わない。(中略)それはなによりもまず、社会の様々な戦線において、多様な方法を駆使し、異なる社会形態の下でさまざまな段階の妥協と参加をみた闘争の結果生まれる革命となるだろう。そしてそれをもたらすものは、特定の社会的提案をかかげ勝利に酔う、特定の政党や組織、あるいは組織間の同盟ではなく、それぞれ異なる政治的諸提案をつき合わせまとめる民主的空間の創出となるだろう。この問題解決のための民主的空間には、切り離すことのできない歴史的な三つの前提がある。それは社会的に重要な提案を決定する民主制、提案を支持する自由、そしてそれらの提案が従うべき正義である。(中略)メヒコにおける革命的変革は、単一の同質的徒党やそれを領導するひとりの頭領による単一指導體制のもとではなく、多数勢力の結集によって導かれるだろう。その多数勢力内で指導的になる者は、変動するだろうが、つねに民主主義、正義、自由という三点を共通軸にして形成される。

その三原則に、新生メヒコが生まれるか否かがかかっている。社会的平和は、すべての者にとってそれが正当で価値のあるものであるときにのみ可能なのだ。」(113 頁)

「ジョン・ホロウェイは言う—国家を志向する変革運動組織は、「男、とりわけ若い男を特権化する。なぜならば、それは、国家（革命）に向けた経験の蓄積を優位におき、革命への職業的な献身を要求するから、社会的経験と活動のヒエラルキー化を必然とする。それは、愛情・子どもと遊ぶ・繊細な感情などの表現を軽視することに繋がる」のが普通だが、サパティスタは「革命のための小集団から、武装せるコミュニティへと転化することで、その陥穽に陥ることを免れた—と。」(114 頁)

「ロシア革命に始まる 20 世紀型社会革命の運動においては、「反革命に死を与える」という論理が、けっこう安易に受容されてきたという歴史的現実があった。」「自分たちが「反革命」と規定する運動を、実践上で凌駕するという意味に捉えるならまだしも、ここでは、「反革命」が具体的な個人によって体現されているという確信にまで飛躍する。制度の変革によって、そこで生きる人間の価値意識も変革されるという長い道筋をたどるよりは、目の前にいる「反革命」を「敵」と規定して、即、その罪万死に値するという短絡した結論を導き出して、それを実行に移すのである。それがどれほど「革命」の退廃をもたらしてきたかという問題意識は、自らが所属する組織の絶対的正しさを確信する党派の人間のなかでは、ついぞ生まれることはない。」(221 頁)

「(左翼党派運動には)死刑制度そのものに、ましてやこの制度を廃止するという運動に対する関心は少ないように思える。党派運動志向者の中には、自分たちの党派が国家「権力」を掌握した時を夢見て、その権力を手にしたときに揮うことのできる「敵対者を抹殺する権利」を手放す未来など

考えたこともない人々がいるからである。日本の内ゲバ党派は、その日々の実践において、彼らが呼号していた見果てぬ夢としての「革命」が成り、自らの党派が「権力」の座に就いたならば、スターリン時代のソ連のように、「<反対者>を拷問・粛清・死刑に処し、あるいは強制収容所送りにする」ことになるだろうという未来像を先取りして示していたのである。それが「反スターリン主義」の名の下に実践されていたからこそ、この未来像に恐怖をおぼえた人々が、70年代半ば以降、内ゲバ党派ばかりか、彼ら/彼女らには「大同小異としか見えない」すべての左翼運動への見切りをつけ始めたのだといえる。」(222頁)

「内ゲバ問題を考えることは、こうして、党(組織)・革命・国家・国家権力などの」諸問題の本質を考えることに繋がっていかざるを得ない。70年代以降の悲劇的な内ゲバの歴史の中にあって、ときおり、個人のレベルにおいてなら、自らがなした内ゲバ行為に関して深刻な自己批判を行った例がないではない。しかし、それは、ついに、組織全体のレベルで行われるものとはならないままに、今日に至っている。」(223頁)

以上。

研究会 議事録 2015年6月28日

テーマ：日本の左翼はなぜ影響力をうしなったのか

太田昌国「極私的 60年代追憶 精神のリレーのために」をいかに読む／応答するか

報告編（後藤）

○事務局で太田さんをこの秋、招くことはできないか、という話をしています。その際、事前に検討議論をした方がいいのでは、ということになって、今回の研究会を持ちました。彼の本の趣旨は、「日本の左翼がなぜ影響力を失ったのか」ということについて、一貫した問題意識の下に書かれている。それをテーマにして議論しようということになった。

○私が彼の問題提起に応答しろということになった。彼の切り口は、60年代の運動、特に新左翼運動およびその周辺について、いろんな左翼的言説を巡って批判的に回顧するというものです。文化や植民支配の問題など、多岐にわたるが、今回この中で、国家、暴力、組織という点に焦点を絞って報告します。

○レジュメで、3ページ以降、彼の引用をしております。（既読者が少なかったので）では、彼の引用を見ていきましょう。

○彼自身の自己規定は、マルクスレーニン主義に対する批判的態度、あるいは根本的違和感を表明している。しかし、アナキズムに立ち切れるかということ、それもできない。山口健次辺りを引用しながら、アナルコ・コミュニズムであると、いいとこ取りをしようという立場を表明している。

○引用文紹介 レジュメ4ページ

○太田さんはラテンアメリカの連帯運動、その前に「世界革命情報」という第三世界と日本を繋ぐ作業を70年代からしてきて、サパティスタ関係の書籍を翻訳や自著を出されている。

○引用文紹介 レジュメ5ページ

○基本的に、太田さんの提起した問題は避けて通れないものだと思います。これを避けると、思想的な頹廢につながる。そうすれば、新しい社会を切り開くといったことはできない。この間の私自身の考え方です。

○先に言っておきますが、私自身は、20世紀までは、00年代以前まではマルクスレーニン主義的な考え方の枠組の中でずっと思考してきました。共産同〇〇派という党派は、全国主要都市に於けるプロレタリアートの全国一斉武装蜂起を組織する党ということで、自己規定していた。私は、それを大枠受けいる形で党派選択しました。なので、その結果、どうならざるをえないのか、私自身が深刻に自分自身のことを考えてきたということがある。それらを踏まえて、私は今や、ここで太田さんが提起している問題を避けて通れないという風に思うようになった。この15年間、私なりに模索を続けてきた。

○何故、左翼が影響力を失ったのかということへの、ここで提起された問題への十全なる解答が作り出せていない現状がある。それをレジュメで、社会主義の失墜と新左翼諸党派の路線問題としてまとめました。前者は、以前報告したものと同じです。抑圧体制としての「社会主義国」という現状があるという認識。それを生み出したものは、マルクスレーニン主義の基本路線そのものにあるのではないかと、いう風に考えるようになってきた。基本路線とは何かというと、生産手段の私的所有の廃絶が必要である、そしてそのためにブルジョア国家の暴力的破壊、すなわち暴力革命と死滅するプロレタリア国家（ソビエト）の樹立が必要だと。このプロ独を梃子として、ブルジョアジーを収奪し、生産手段を国有化するんだと。しかし、このプ

ロ独国家は、官僚制と常備軍を主要構成要素とするブルジョア国家とは違って、死滅する国家なんだと。我々にとってはこの部分が、救いである。死滅する過程では、さまざまな過渡期が必要であって、それを避けることができない。しかし、実際上は国家は死滅しなかった。官僚機構と軍は革命後も復活してしまっている。ブルジョア国家機構を革命政党が独占するということになった。この国家によって労働者を搾取、管理、抑圧が行われる。誰もそんなものは望まない。これをオルタナティブとして掲げ続ける限りは、左翼に未来はない。

○では、何故国家は死滅しなかったのか。その根拠を三点挙げている。一点目は、「官僚機構と軍隊の肥大化・抑圧装置化を招く要因としての暴力革命」つまり敵の暴力装置を破壊する、その効率や有効性が問題になる。ゲリラ戦なのか正規軍の建設なのか、さまざま論議されてきた問題なのですが、最終的には現実主義的には「敵と相似形の革命組織：中央集権的党組織と革命軍」を作って、敵の暴力を物理的にぶち破る。そうでなければ、革命か死か、ということで敵に殲滅させられてしまう。それで、権力を握れば、集権党による官僚組織と革命軍への依拠に基づく一党独裁がその時点で成立する。反革命からの革命の防衛という大義名分が、これ以上ないほど強い形で正当化として働く。これを受け入れた段階で、国家の死滅という共産主義の理念を放棄していかざるをえない。これを防ぐ唯一の方法は、「党の革命」である。暴力革命によって権力を掌握した場合、その革命党による党の革命、すなわち一党独裁から権力の分散、労働者による対抗権力の形成、プロレタリア民主主義の形成を目指す党への転換が唯一の道だろう。残念ながら、これに成功した革命党派はいない。なぜか。経験主義や現実主義が党内を支配するから。それによって、党の革命が困難、ほぼ不可能と思われる状況に追い込まれる。その結果、官僚組織、常備軍へ溶解してしまう。つまり、マルクスレーニン主義の基本路線にとって党による党の革命が唯一希望な訳ですが、だが、それは本当に可能なのか？それを問わなければならない。

○これを更に補強するのが、根拠その二です。つまり帝国主義の包囲です。帝国主義の反革命介入から革命を防衛するために、ブルジョア国家機構の増強が正当化される。残念ながら、レーニンの頃の実践ではこの問題を取り扱うことができなかったのだと思う。つまり、国家の二面性、階級抑圧としての国家と、他の国家との抗争という関係に置かれざるを得ないという側面、この二面がある訳ですが、レーニンが「国家と革命」で述べているのは、前者のみである。階級抑圧の道具としての国家だけ。国家のこの側面に対して如何なる方針をとるのかということだけが論じられている。

○この点におけるマルクスレーニン主義の枠組は、下からの革命の推進、世界党建設をして社会主義国家をひとつひとつ拡大していくというもの。赤軍がワルシャワ侵攻をしたように、革命の輸出ということも含めて、国民国家ひとつひとつを地政学的に拡大していくということが、論理的枠組にならざるをえない。だが、他の国家との抗争という問題に対応するためには、上からの政界政府形成運動が不可欠だろうというのが、私の結論です

○もうひとつ、国家が死滅しなかった理由として生産手段の国有化とその下での計画経済の運営、この問題も強固な問題としてあったのではないか。産業連関表を管理運営する官僚機構に依存せざるをえない。その下での、生産・流通・分配・消費における労働者の支配、コントロールを正当化せざるをえない。これらのことが要因としてあるのではないか。

○以上、マルクスレーニン主義の基本路線の問題と関連しているが相対的別個の問題として、新左翼諸党派の路線問題がある。端的に言うと政治の狭さということになる。三つの要因からなっている。一つは、国家＝抑圧の道具論。それに基づいて 60 年代新左翼の運動の当面の目

標が、機動隊の壁の物理的突破におかれた。政策阻止闘争の急進化、機動隊の壁の物理的突破、そのための武装闘争、という枠組で運動と組織と戦術が遂行された。これが、60年代だけではなくて、70年80年代と、どうかすると、未だに狭い政治がまかり通っている、というのがここでの問題提起です。

○この問題を考える手がかりとして、二番目ですが、ブルジョア権力の作動様式の多層化という問題がある。実は、次の研究会のテーマを<共>（コモン）を巡ってやろうということになっているのですが、コモンは「生政治」という概念と非常に重なり合って議論されている。それで生政治とは何なんだろうかと振り返ろうと書いていろいろ読んできたんですが、ブルジョア権力の作動様式の多層化という問題が生政治を理解する上で重要な要素となっている。ブルジョア権力、すなわち秩序を維持する、あるいはそれに反対する人たちを強制してその秩序の中に繋ぎ止めようとする、このような働きを権力とすると、いくつかの層がある。ひとつは、官僚制と常備軍で、これは「国家と革命」でも明確に捉えられている。それから、法と処罰。法を規定してそれに逸脱した人は処罰します、監禁します、罰を与えますというもの。三つ目には規律訓練。フーコーのパノプチコンという有名な議論がありますが、個人の肉体に働きかけて、規律すなわち監視の視線を内面化させ、国家に奉仕する能動的な主体として形成するんだ、と。つまり、反乱する人をどう抑え込むかということだけではなくて、進んで臣従する。それが正しいことなんだと思う国民をどう形成するのか。規律訓練装置として形成されたのが、家族、学校、工場、兵舎、監獄、病院など。在る特定の場所に集め、特定の規制をかけて肉体そのものを馴化させていく、という制度そのものが近代以降作られてきた。それによってブルジョア国家機構が作動してきたのだ、という議論。

○さらにもう一層、付け加わる。環境管理と書いています。環境介入という論者もいる。これは個々人の内面に働きかけるのではなく、個々人の置かれた環境、もしくはゲームの規則に働きかけることによって管理する。多様なテクノロジーが生み出されている。一つのグループは、市場、統計、保険。例えば、麻薬にどう対応するのか。供給する側を撲滅するというやり方がかつての方法だったが、新自由主義の時代になると需要の側をコントロールしようとする。個々人に働きかけてコントロールするのではなく、麻薬の危険度の高いものだけを集中的に管理弾圧する。全面的に麻薬を禁じると、手に入りにくくなる。そうすると、価格が高騰し、麻薬のほしい人が別の犯罪に手を染める。それを避けるために、麻薬管理のルールとして、危険な麻薬だけを管理してそれ以外は放置する。社会全体が危険でない範囲で放置する。それでよいとする。

○二つ目のグループは個人認証と個人管理。これは最近、よくあります。例えばマイナンバーがこれに当たります。要するに、住民に対して番号を割り振り、どこかに出たり入ったりするためのパスワードになる。コードになる。管理する側は、このコードをここからここまでという範囲で許可する。その他の番号は自動的に排除する。

○三つ目のグループは都市論という形で議論されている。例えばゲッターとゲーティッドコミュニティ。かつての規律訓練型というのは矯正しよう、個々人の肉体に働きかけて、その考え方を思想的に矯正していくのみならず、肉体を慣れさせるという発想でやってきた。今や、その矯正は諦めて、反秩序的なものをそのままにして、どう管理するのかということを考える。そうすると、逆にメインストリームの人たちは反秩序的な人たちが矯正されずに社会の中に包摂されなくなってきたので危なくてしかたない、ということで、自分たちだけのコミュニティを作って、その中だけで暮らしていれば安全だと。

アンダークラス、小泉義之さんの「負け組の哲学」でB級市民と命名されていた人たちです

ね。今や、アメリカでは公然と使われていて、その「どうしようもない連中」、マルクスの時代では「ルンペンプロレタリアート」みたいなレッテル貼りが行われている。そういう人たちを、「反社会的な生活をしている」ということを基準に容赦なく取り締まる。ゼロトレランス政策と呼ばれているもの。無秩序と犯罪は一続きの延長にあるので、犯罪だけを取り締まるのではなく、そういう無秩序を取り締まる。そうすることによって、犯罪は減るだろうという政策です。ニューヨークのジュリアーニが始めたらしいですが、それがもはや全米に広がっている。この間の、警官と黒人とのトラブルは、おそらくこのゼロトレランス政策が、そういうアンダークラスの人たちに内面化されて、警察に対する非常な恐怖感が現れているという風に理解する。これも矯正して、社会の中に戻すというのではなく、どう管理するのかという角度で政策が行われている。

○以上見てきたように、権力作動様式が幾層にも多層化されて支配が行われている。それに対して、革命の戦術というのも支配の様式の変化に応じて変わっていかなければならない。

○支配の様式の一つ目として君主型という名前を付けましたが、官僚制と常備軍、君主の権威に基づいて、社会を治めようという支配。それに対して機動戦が展開される。それに対して規律訓練型というのは、強力な市民社会の塹壕とグラムシが言った、まさにそれではないか。内面化された規律、主体形成を行う規律訓練装置、それに対応する陣地戦。つまり規律訓練装置そのものを、階級闘争の場にしていくことが提起された。これが、フォーディズム、福祉国家の時代に対応している。

○現代においては環境管理型が支配的になっている。むしろ規律訓練型がまったくゼロになっている訳ではないが、かつての規律訓練装置の、日雇い派遣業者、自由学校、生涯教育、開放病棟、在宅医療への変容等々といった現象が見て取れる。

その背後には、主体が、労働者がその規律訓練装置から横溢するという状況がある。規律訓練型が支配的な時代にあっては、主体はその狭い装置の中に閉じ込められてきた訳ですが、それが社会に拡散する。かつての工場労働者から大衆的労働者へ、大衆的労働者から社会的労働者へ、物質的労働から非物質的労働へという主体の変化にともない、環境管理テクノロジーはそうした主体状況の変化に対応するものとして現れている、そういう状況が進んでいる。

主体形成、包摂がそもそも放棄され始めている。ポストフォーディズム国家、新自由主義国家の中で見られる、権力の方向である。

○問われているのは、これに対応する新たな戦術である。陣地戦がもはや無効ではないか、と言う人たちも現れている。

○最後に、新たな権力の作動様式に対応して、いかなる戦術と組織が求められているのか、という問いですが、これは、簡単に二人の論者の紹介に変えます。一つは廣瀬純で、「暴力階級とは何か」という最近出た著書の中での論述の紹介。以下ガタリからの引用。

「既存の政党や労組によっては組織化されないプレカリアートたちの分子状運動がおのれの自律性をそれとして維持しつつも「既存の勢力に対応し得る」ものとなるために、モル状の次元での新たな政治的組織化の考案が求められる」「どんな社会闘争も「分子状」(フロー、生成変化、相移転、強度など)であるのと同時に「モル状」(主体/客体/表象の固定的配分)でもなければならず、敵対しあうこれら二つの次元の接合を可能にする新たなロジックを開発し、両者があくまでその敵対関係を維持したままそれでもなお運動しうるようにしなければならないという課題」

あらゆる場所で、いろんな抵抗が組織される。それが集団性を帯びて行動に移される。それ

は自然発生的に行われるだろう。それを分子状という言葉で表している。他方、それがモル状、すなわち「表象の固定的配分」、例えば指導者と被指導者とか固定化されたイメージをもつ運動や組織となり、いつのまにか物理的力を持ち始める。両者は矛盾するだけではなくて、敵対的な関係にあるのだという風にガタリなどは言う。しかしながら、両方必要だろう。中央集権的な党派のあり方は、分子状の個々の主体の自発性とは個々の場面では敵対しうる。そういうことを否定しながら、なおかつ政府問題を考える、組織そのものを形成していくということは如何にしたら可能なのか。

廣瀬によれば、既にそれらは模索が始まっている。ブラジルの労働者党、ポルトガルの左翼ブラック、フランスの反資本主義党、スペインの怒れる者たちの運動等。それらにおいて、実験的に模索されている。

○もうひとつは、新しいアナーキスト。グレーバーの引用。

「アナーキズムは高踏理論構築の役に立たないだけではない。それは何よりも、実践の形式に関わるものなのである。だから、それが何より重視するのは、①方法が目的と協調していなければならない、②権威主義的な方法によって自由を獲得することはできない、③できうるかぎり、自分の友人や同志とのなかで、自らがめざす社会を具現化せねばならない。」(グレーバー)

マルクスレーニン主義的な発想は、目的と手段が分離して、共産主義すなわち自由な連合を達成するために、それとは正反対の手段を使ってそれを成し遂げる、という問題設定されてきたけれども、それではダメなんだと。